慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福澤研究センターにおける内山秀夫先生
Sub Title	
Author	坂井, 達朗(Sakai, Tatsuro)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.3 (2009. 3) ,p.142- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 内山秀夫先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20090328-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤研究センターにおける内山秀夫先生

私は学部・大学院を通じて法学部にも先生のゼミナールにも無縁に過ごし、また政治学は不勉強、しかも学校を出てから永い間地方にいたから、学者としての内山先生の業績や法学部教授としての先生のご活躍について語る資格は全くない。単なる個人的な思い出に終始する失礼をお許し頂きたい。

私が先生に親しくご指導をいただく機会を得たのはずっと後になってからであるが、先生のお名前を意識したのはかなり早く、昭和四〇年の春休みの最中、三年生に進級する前に一度校舎を見て置こうと思って三田を訪れ、ふと生協の書籍売り場に入った時のことであった。新学期を前にして多くの教科書が平積みになっていた中に、アイゼンシュタットの近代化論のリプリント版の薄いパンフレットがあったのを偶然見つけて購入した。その山に付けられた札に「法学部内山秀夫先生」とあったのを目にしたのである。他学部の学生であったから、その講義を受講しようと思った訳ではなく、何となく「近代化論」という表題に惹かれたまでのことであり、先生のお名前も直に忘れてしまったと思う。

それから一〇年近くたって、私はもう一度内山秀夫というお名前を、今度は有斐閣の宣伝パンフレット「書斎の窓」誌上で、多くの社会科学者が学生時代の思い出を書いておられる中に発見した。地方の学校で友人も少ない寂しい想いをしていた時であったから、義塾大学院社会学研究科で私も教えを受けた米山桂三先生の思い出などを読み、ねずみ色のパンフレットを懐かしく思い出した。

そんないきさつがあったから、何年か後に福澤研究センターのお手伝いをするようになり、始めてお眼にかかった時も、古い知り合いに邂逅したような気がして嬉しく、気楽に調査などをご一緒させていただいた。センターの設立の当初であった当時、先生は恩師であられた石坂巌先生をはじめとして、各学部から長老教授を次々と所長に迎え、ご自身はその許で永く副所長として実務を担当され、研究所としてのセンターの活動の基本路線の確立に努めておられた。そのために「福澤門下生の地方

での活動」、「近代日本におけるリベラリズムの研究」など、幾つかの共同研究のプロジェクトを主催され、それがその後のセンターの基本的な研究方法になった。その際に先生が貫かれた理念は、センターをできるだけ「開かれた」研究機関として国内外の学者の利用に供し、福沢および近代日本研究の一大中心にするという、気宇壮大なものであった。

その後、先生は慶應義塾の御定年を前に、新潟に新しい大学を創設する仕事に没頭されるようになり、センターの管理は後輩に当たられる西川俊作先生へ引き継がれ、西川先生の御発病後は坂井がお預かりするようになったが、中年を過ぎてからの「帰り新参」であった私は学内の事情に疎く、そのためセンターの運営に関して戸惑うことがしばしばであったが、その都度まず内山先生のご助言を仰いで問題を解決していた。時には先生が東京のお宅に帰られるのを待ち切れずに、新潟のアパートにまでお邪魔してご教示を乞うたこともあった。そうした場合先生は、すでに退職した人間が以前の職場の事に口を出すのは好ましいことではないと前置きされながらも、義塾の要所要所に持っておられた豊かな人脈をたどって、適切なアドバイスをくださるのが常であった。一見すると磊落で時に豪放にも見え、またいたずら好きなやんちゃ坊主の様な一面すらあったそのお人柄の背後には、細やかで緻密な心配りが隠れていることがよく理解された。その意味で先生は足腰の脆弱な私にとっては、かけがえのない杖でありまた柱でもあった。

私の頼りないことをよくご承知になった先生は、お目にかかる度に、福澤センターを外に対して閉じた研究所にしてはならない旨をお諭しになったが、微力な私はそのご期待に十分にはお応えできないことを恐れるのが常であった。それは学界に広い人脈を持たれる内山先生にして始めて可能であるように思えた。しかし幸い私が退いた後は小室正紀所長、また小室さんの後は米山光儀所長のご活躍により、センターは着々と体制を固め、先生が望まれた方向にむかって確かな歩みを続けているように思われる。それを見て在天の霊も心を安ぜられることであろう。

この一、二年、私達は先生のご病状の篤いことは承知しながらも、素人の悲しさで為す術もなく、唯々奇跡を信じて一縷の望みを託すしかなかった。三月二三日、ご

入院先をお見舞いした時も、話柄は福澤センターの将来に関する事柄に終始し、センターに寄せる篤い想いがひしひしと伝わってくる三〇分間であった。その時はそれ程差し迫っているとは思えなかったが、ご容態の急変により四月六日、再びお声を聞くことができなくなってしまったのは痛恨の極みであるが、一足先に旅立たれた恩師石坂巌先生とお逢いになり、談笑されるお姿が彷彿とするのがせめても慰めである。

合掌。

名誉教授・帝京大学教授　坂　井　達　朗

白紙の葉書

お通夜が終わった後、「白紙の葉書」を内山先生の奥様の富美子さんからいただいた。葉書の表にはいつもとは違って、乱雑に私の住所と氏名だけが書かれ、裏には何も書かれていなかった。

例年、冬になると広島の牡蠣を先生に送っていた。亡くなられた二〇〇八年の一月に先生から礼状をいただいた。

「カキのご恵送にあずかりました。篤く御礼を申します。早速家人が茶碗蒸しに仕立ててくれまして、少し熱目にできたので、ほうゝと息を少し吹きかける思いで頂戴しました。おいしゅうございました。至福の時間でした。ありがとう。」

先生はやっとのことで、これだけのことを書かれたに違いない。

その前年、二〇〇七年の一月、内山先生からいただいた葉書が手元にある。